

# 櫓ノ木大学士の野宿

宮沢賢治

青空文庫



櫛ノ木大学士は寶石学の専門だ。

ある晩大学士の小さな家へ、

「貝の火兄けいてい弟商会」の、

赤鼻の支配人がやって来た。

「先生、ごく上等の蛋白石たんぱくせきの注文があるのですがどうでしょう、お探しをねがえませんか。もつともごくごく上等のやつをほしいのです。何せ相手がグリーンランドの途方とほうもない成金なりきんですから、ありふれたものじやなかなか承知しないんです。」

大学士は葉巻を横にくわえ、

雲母紙うんもしを張った天井てんじょうを、

斜ななめに見上げて聴きいていた。

「たびたびご迷惑めいわくで、まことに恐れ入りますが、いかがなものでございましょう。」

そこで櫛ノ木大学士は、

にやつと笑って葉巻をとった。

「うん、探してやろう。蛋白石のいいのなら、流紋玻璃りゅうもんはりを探せばいい。探してやろう。」

僕は實際、一ぺんさがしに出かけたら、きつともう足が宝石のある所へ向くんだよ。そして寶石のある山へ行くと、奇体きたいに足が動かない。直覺だねえ。いや、それだから、却かえつて困ることもあるよ。たとえば僕は一千九百十九年の七月に、アメリカのジャイアントアーム会社の依いしよく嘱しよくを受けて、紅宝ルビー玉を探しにビルマへ行つたがね、やっぱりつか足は紅宝玉ルビーの山へ向く。それからちゃんと見附みつかつて、帰ろうとしてもなかなか足があがらない。つまり僕と宝石には、一種の不思議な引力が働いている、深く埋うずまつた紅宝玉ルビーどもの、日光の中へ出たいというその熱心が、多分は僕の足の神経に感ずるのだろうね。その時も實際困つたよ。山から下りるのに、十一時間もかかったよ。けれどもそれがいまのバララゲの紅宝玉坑ルビーこうさ。」

「ははあ、そいつはどうもとんだご災難くさいでございました。しかしかがでございました。こんども多分はそんな工合くあいに参りましょうか。」

「それはもうきつとそう行くね。ただその時に、僕が何かの都合つごうのために、たとえばひどく疲つかれているとか、狼おおかみに追われているとか、あるいはひどく神経が興奮していると、そんなような事情から、ふつとその引力を感じないというようなことはあるかもしれない。しかしとにかく行つて来よう。二週間目にはきつと帰るから。」

「それでは何分お願いいたします。これはまことに軽少ですが、当座の旅費のつもりです。」

貝の火兄弟商会の、

鼻の赤いその支配人は、

ねずみ色のじょうぶくろ状袋を、

上着のうちポケット内衣囊から出した。

「そうかね。」

大学生は別段気にもとめず、

手を延ばして状袋をさらい、

自分の衣囊かぶしに投げこんだ。

「では何分とも、よろしくお願いいたします。」

そして「貝の火兄弟商会」の、

赤鼻の支配人は帰って行った。

次の日諸君のうちの誰たれかは、

きつと上野の停車場ていしやばで、

途方もない長いがいと外套とうを着、  
 変な灰色の袋のような背はいのう囊うをしょい、  
 七キログラムもありそうな、  
すてき素敵すてきな大きななづちを、  
 持しんしった紳士しんしを見ただろう。  
 それは櫛しんしの木大学士だ。  
 宝石たけを探でしに出掛かけたのだ。  
 出掛たけた為ためにとうとう櫛ためノ木大学士の、  
 野宿やじやくということも起おつたのだ。  
 三晩さんばんというものも起おつたのだ。

野宿第一夜

四月二十日の午後四時頃、  
 例なの櫛ならノ木大学士が

「ふん、この川筋があやしいぞ。たしかにこの川筋があやしいぞ」とひとりぶつぶつ言いながら、

からだを深く折り曲げて

眼めいっばい一杯いっぱいにみひらいて、

足もとの砂利じゃりをねめまわしながら、

兎うさぎのようにひよいひよいと、

葛くずまる丸川まるがわの西岸せいがんの

大きな河原をのぼって行つた。

両側りょうがわはすいぶん峻げんしい山だ。

大学生はどこまでも溯のぼって行く。

けれどもとうとう日も落ちた。

その両側の山どもは、

一いっしょうけんめい生懸命いっしょうけんめいの大学生などにはお構いなく

ずんずん黒く暮くれて行く。

その上にちよつと顔を出した

遠くの雪の山脈は、

さびしい銀いろに光り、

てのひらの形の黒い雲が、

その上を行ったり来たりする。

それから川岸の細い野原に、

ちよろちよろ赤い野火が這い、

鷹たかによく似た白い鳥が、

鋭く風を切つて翔かけた。

櫛ノ木大学士はそんなことには構わない。

まだどこまでも川を溯つて行こうとする。

ところがとうとう夜になった。

今はもう河原の石ころも、

赤やら黒やらわからない。

「これはいけない。もう夜だ。寝ねなくちやなるまい。今夜はずいぶん久しぶりで、愉快ゆかいな

露天ろくてんに寝るんだな。うまいぞうまいぞ。ところで草へ寝ようかな。かれ草でそれはたしか

にいいけれども、寝ているうちに、野火にやかれちや「いちごん言もない。よしよし、この石へ寝よう。まるでね台だ。ふんふん、実にやわ柔らかだ。いい寝台ねだいだぞ。」

その石は実際柔らかで、

又敷布またしきふのように白かった。

そのかわり又大学士が、

腕うでをのばして背囊をぬぎ、

肱ひじをまげて外套のまま、

ごろりと横になったときは、

外套のせなかに白い粉が、

まるで一杯についたのだ。

もちろん学士はそれを知らない。

又そんなこと知ったところで、

あわてて起きあがる性質でもない。

水がその広い河原の、

向う岸近くをごうと流れ、

空の桔梗ききようのうすあかりには、

山どもがのつきのつきと黒く立つ。

大学士は寝たままそれを眺め、

又ひとりごとを言い出した。

「ははあ、あいつらは岩頸がんけいだな。岩頸だ、岩頸だ。相違そういない。」

そこで大学士はいい気になって、

仰向けあおむのまま手を振ふって、

岩頸の講義をはじめ出した。

「諸君、手っ取り早く云いうならば、岩頸というのは、地殻ちかくから一寸頸ちよつとくびを出した太い岩石の棒である。その頸がすなわち一つの山である。ええ。一つの山である。ふん。どうしてそんな変なものができたというなら、そいつは蓋けだし簡単だ。ええ、ここに一つの火山がある。熔岩ようがんを流す。その熔岩は地殻の深いところから太い棒になってのぼって来る。火山がだんだん衰おとろえて、その腹の中まで冷えてしまう。熔岩の棒もかたまってしまう。それから火山は永い間に空気や水のために、だんだん崩くずれる。とうとう削けずられてへらされて、しまいには上の方がすっかり無くなつて、前のかたまつた熔岩の棒だけが、やっとなるとい

うあんばいだ。この棒は大抵頸だけを出して、一つの山になっている。それが岩頸だ。ははあ、面白<sup>おもしろ</sup>いぞ、つまりそのこれは夢の中<sup>ゆめ</sup>のもやだ、もや、もや、もや、もや。そこでそのつまり、鼠<sup>ねずみ</sup>いろの岩頸だがな、その鼠いろの岩頸が、きちんと並<sup>なら</sup>んで、お互<sup>たがい</sup>に顔を見合せたり、ひとりで空うそぶいたりしているのは、大変おもしろい。ふふん。」

それは実際その通り、  
向うの黒い四つの峯<sup>みね</sup>は、

四人兄弟の岩頸で、

だんだん地面からせり上って来た。

檐<sup>なら</sup>ノ木大学士の喜びようはひどいもんだ。

「ははあ、こいつらはラクシヤンの四人兄弟だな。よくわかった。ラクシヤンの四人兄弟だ。よしよし。」

注文通り岩頸は

丁度胸までせり出して

ならんで空に高くそびえた。

一番右は

たしかラクシヤン第一子

まつ黒な髪かみをふり乱し

大きな眼をぎろぎろ空に向け

しきりに口をぱくぱくして

何かどなっている様だが

その声は少しも聞えなかった。

右から二番目は

たしかにラクシヤンの第二子だ。

長いあごを両手に載ねむせて睡ねむっている。

次はラクシヤン第三子

やさしい眼をせわしくまたたき

いちばん左は

ラクシヤンの第四子しし、末っ子だ。

夢むのような黒い瞳ひとみをあげて

じつと東の高原を見た。

櫛ノ木大学士がもつとよく

四人を見ようと起き上つたら

俄にわかにラクシヤン第一子が

雷かみなりのように怒鳴り出した。

「何をぐずぐずしてるんだ。潰つぶしてしまえ。灼やいてしまえ。こなごこなに碎くだいてしまえ。早

くやれつ。」

櫛ノ木大学士はびっくりして

大急ぎで又横になり

いびきまでして寝たふりをし

そつと横目で見つづけた。

ところが今のどなり声は

大学士に云つたのでもなかつたようだ。

なぜならラクシヤン第一子は

やっぱり空へ向いたまま

素敵などなりを続けたのだ。

「全体何をぐずぐずしてるんだ。砕いちまえ、砕いちまえ、はね飛ばすんだ。火をどしやどしや噴くんだ。熔岩の用意つ。熔岩。早く。畜生。いつまでぐずぐずしてるんだ。熔岩、用意つ。もう二百万年たってるぞ。灰を降らせろ、灰を降らせろ。なぜ早く支度をしないか。」

しずかなラクシヤン第三子が

兄をなだめて斯う云った。

「兄さん。少しおやすみなさい。こんなしずかな夕方じやありませんか。」

兄は構わず又どなる。

「地球を半分ふきとばしちまえ。石と石とを空でぶっつけ合せてぐらぐらする紫のいなびかりを起せ。まっくろな灰の雲からかみなりを鳴らせ。えい、意気地なしども。降らせろ、降らせろ、きらきらの熔岩で海をうずめろ。海から騰る泡で太陽を消せ、生き残りの象から虫けらのはてまで灰を吸わせろ、えい、畜生ども、何をぐずぐずしてるんだ。」

ラクシヤンの若い第四子が

微笑つて兄をなだめ出す。

「大兄さん、あんまり憤らないで下さいよ。イーハトブさんが向うの空で、又笑つていま

すよ。」

それからこんどは低くつぶやく。

「あんな銀の冠かんむりぼくを僕もほしいなあ。」

ラクシヤンの狂暴な第一子も

少ししずまって弟を見る。

「まあいいさ、お前もしつかり支度をして次の噴火にはあのイーハトブの位になれ。十二ヶ月の中の九ヶ月をあの冠かぎで飾れるのだぞ。」

若いラクシヤン第四子は

兄のことばは聞きながし

遠い東の

雲を被かぶつた高原を

星のあかりに透すかし見て

なつかしそうに呟つぶやいた。

「今夜はヒームカさんは見えないなあ。あのまっ黒な雲のやつは、ほんとうにいやなやつだなあ、今日で四日もヒームカさんや、ヒームカさんのおつかさんをマントの下にかくし

てるんだ。僕一つ噴火ふんかをやつてあいつを吹き飛ばしてやろうかな。」

ラクシヤンの第三子が

少し笑つて弟に云う。

「大へん怒おこつてるね。どうかしたのかい。ええ。あの東の雲のやつかい。あいつは今夜は雨をやつてるんだ。ヒームカさんも蛇紋石じやもんせきのきものがずぶぬれだろう。」

「兄さん。ヒームカさんはほんとうに美しいね。兄さん。この前ね、僕、ここからかたくりの花を投げてあげたんだよ。ヒームカさんのおつかさんへは白いこぶしの花をあげたんだよ。そしたら西風がね、だまつて持つて行つて呉くれたよ。」

「そうかい。ハツハ。まあいいよ。あの雲はあしたの朝はもう霽はれてるよ。ヒームカさんがまばゆい新らしい碧あおいきものを着てお日さまの出るころは、きつと一番さきにお前にあいつするぜ。そいつはもうきつとなんだ。」

「だけど兄さん。僕、今度は、何の花をあげたらいいだろうね。もう僕のところには何の花もないんだよ。」

「うん、そいつはね、おれの所にね、桜草さくらそうがあるよ、それをお前にやろう。」

「ありがとう、兄さん。」

「やかましい、何をふざけたことを云ってるんだ。」

あらか  
暴つぽいラクシヤンの第一子が

金粉の怒鳴り声を

夜の空高く吹きあげた。

「ヒームカってなんだ。ヒームカって。

ヒームカって云うのは、あの向うの女の子の山だろう。よわむしめ。あんなものときあうのはよせと何べんもおれが云ったじやないか。ぜんたいおれたちは火から生れたんだぞ青ざめた水の中で生れたやつらとちがうんだぞ。」

ラクシヤンの第四<sup>し</sup>子は

しよげて首を垂れたが

しずかな直<sup>じ</sup>かの兄が

弟のために長兄をなだめた。

「兄さん。ヒームカさんは血統はいいのですよ。火から生れたのですよ。立派なカンランガンですよ。」

ラクシヤンの第一子は

尚なおさら更怒いらつて

立派な金粉のどなりを

まるで火のようにあげた。

「知つてるよ。ヒーム力はカンランガンさ。火から生れたさ。それはいいよ。けれどもそんなら、一体いつ、おれたちのようにめざましい噴火をやったんだ。あいつは地面まで騰のぼつて来る途とちゆう中で、もう疲つかれてやめてしまったんだ。今こそ地殻ちかくののろのろのぼりや風や空気のおかげで、おれたちと肩かたをならべているが、元来おれたちとはまるで生れ付きがちがうんだ。きさまたちには、まだおれたちの仕事がよくわからないのだ。おれたちの仕事はな、地殻の底の底で、とけてとけて、まるでへたへたになつた岩がん漿しょうや、上から押しつけられて古綿かたまりのようにちぢまつた蒸気やらを取つて来て、いざという瞬しゆんかん間かんには大きな黒い山の塊かたまりを、まるで粉々に引き裂さいて飛び出す。

煙けむりと火とを固めて空に抛なげつける。石と石とをぶつつけ合せていなすまを起す。百万の雷を集めて、地面をぐらぐら云わせてやる。丁度、櫛ならノ木大学士というものが、おれのどなりをひよつと聞いて、びっくりして頭をふらふら、ゆすぶつたようにだ。ハツハツハ。山も海もみんな濃こい灰うすに埋うづまつてしまう。平らな運動場のようになってしまう。その熱い

灰の上でばかり、おれたちの魂たましいぶとうは舞踏ぶたうしている。いいか。もうみんな大きすぎだ。さて、その煙が納まって空気が奇麗きれに澄すんだときは、こつちはどうだ、いつかまるで空へ届くくらい高くなつて、まるでそんなこともあつたかというような顔をして、銀か白金かの冠ぐらいをかぶつて、きちんとすましているのだぞ。」

ラクシャンの第三子は

しばらく考えて云う。

「兄さん、私はどうも、そんなことはきらいです。私はそんな、まわりを熱い灰でうずめて、自分だけ一人高くなるようなそんなことはしたくありません。水や空気がいつでも地面を平らにしようとしているでしょう。そして自分でもいつでも低い方低い方と流れて行くでしょう、私はあなたのやり方よりは、却かえつてあの方がほんとうだと思ひます。」

暴あちつばいラクシャン第一子が

このときまるできらきら笑つた。

きらきら光つて笑つたのだ。

(こんな不思議な笑いようを

いままでおれは見たことがない、

愕おどろくべきだ、立派なもんだ。」

櫛ノ木学士が考えた。

暴つぽいラクシヤンの第一子が

ずいぶんしばらく光つてから

やつとしずまって斯こう云つた。

「水と空氣かい。あいつらは朝から晩まで、俺おいらの耳のそばまで迄来て、世界の平和の為ために、お前らの傲慢ごうまんを削けずるとかなんとか云いながら、毎日こそこそ、俺らを擦こすつて耗へらして行くが、まるつきりうそさ。何でもおれのきくとこに依よると、あいつらは海岸のふくふくした黒土や、美しい緑いろの野原に行つて知らん顔をして溝みぞを掘ほるやら、濠ほりをこさえるやら、それはどうも実にひどいもんだそうだ。話にも何にもならんというこつた。」

ラクシヤンの第三子も

つい大声で笑つてしまう。

「兄さん。なんだか、そんな、こじつけみたいな、あてこすりみたいな、芝居しばいのせりふのようなものは、一向あなたに似合いませんよ。」

ところがラクシヤン第一子は

案外に怒り出しもしなかった。

きらきら光って大声で

笑って笑って笑って笑ってしまった。

その笑い声の洪水は

空を流れて遙かに遙かに南へ行つて

ねぼけた雷のようにとどろいた。

「うん、そうだ、もうあまり、おれたちのがらにもない小理窟は止そう。おれたちのお父さんにすまない。お父さんは九つの氷河を持っていらしゃったそうだ。そのころは、ここらは、一面の雪と氷で白熊や雪狐や、いろいろなけものが居たそうだ。お父さんはおれが生れるときなくなられたのだ。」

俄かにラクシヤンの末子が叫ぶ。

「火が燃えている。火が燃えている。大兄さん。大兄さん。ごらんなさい。だんだん拡がります。」

ラクシヤン第一子がびっくりして叫ぶ。

「熔岩、用意つ。灰をふらせろ、えい、畜生、何だ、野火か。」

その声にラクシヤンの第二子が  
びっくりして眼をさまし、

その長い顎をあげて、

眼を釘づけにされたように

しばらく野火をみつめている。

「誰かやったのか。誰だ、誰だ、今ごろ。なんだ野火か。地面の埃をさらさらさらつと掃除する、てまえなんぞに用はない。」

するとラクシヤンの第一子が

ちよつと意地悪そうにわらい

手をばたばたと振って見せて

「石だ、火だ。熔岩だ。用意つ。ふん。」

と叫ぶ。

ばかなラクシヤンの第二子が

すぐ釣り込まれてあわて出し

顔いろをぼつとほてらせながら

「おい兄貴、一吠えしようか。」  
と斯う云った。

兄貴はわらう、

「一吠えつてもう何十万年を、きさまはぐうぐう寝ていたのだ。それでもいくらかまだ力

が残っているのか」

無精な弟は只一言

「ない」

と答えた。

そして又長い顎をうでに載せ、

ぽっかりぽっかり寝てしまふ。

しずかなラクシヤン第三子が

ラクシヤンの第四子に云う

「空が大へん軽くなつたね、あしたの朝はきつと晴れるよ。」

「ええ今夜は鷹が生まれせんね」

兄は笑つて弟を試す。

「さっきの野火で鷹の子供が焼けたのかな。」

弟は賢く答えた。

「鷹の子供は、もう余程、毛も剛くなりました。それに仲々強いから、きつと焼けないで遁げたでしょう」

兄は心持よく笑う。

「そんなら結構だ、さあもう兄さんたちはよくおやすみだ。楯ノ木大学士と云うやつもよく眠っている。さつきから僕等の夢を見ているんだぜ。」

するとラクシヤン第四子が

ずるそうに一寸笑つてこう云つた。

「そんなら僕一つおどかしてやろう。」

兄のラクシヤン第三子が

「よせよせいたずらするなよ」

と止めたが

いたずらの弟はそれを聞かずに

光る大きな長い舌を出して

大学士の額をべろりと嘗めた。

大学士はひどくびっくりして

それでも笑いながら眼をさまし

寒さにかたつと顫えたのだ。

いつか空がすっかり晴れて

まるで一面星が瞬き

まっ黒な四つの岩頸が

ただしくもとの形になり

じつとならんで立っていた。

### 野宿第二夜

わが親愛な櫓ノ木大学士は

例の長い外套を着て

夕陽をせ中に一杯浴びて

すつかりくたびれたらしく

度々たびたび 空気に嘸かみつくような

大きな欠伸あくびをやりながら

平らな熊出街くまいでいじょう道を

すたすた歩いて行つたのだ。

俄にわかに道の右側に

がらんとした大きな石切場が

口をあいてひらけて来た。

学士は咽喉のどをこくつと鳴らし

中に入つて行きながら

三角の石かけを一つ拾い

「ふん、ここも角閃花崗岩かくせんかこうがん」と

つぶやきながらつくづく

あたりを見れば石切場、

石切りたちも帰つたらしく

小さな笹ささの小屋が一つ

淋さびしく隅すみにあるだけだ。

「こいつはうまい。丁度いい。どうもひとのうちの門かどぐち口に立って、もしもし今晚は、私は旅の者ですが、日が暮くれてひどく困っています。今夜一晩泊とめて下さい。たべ物は持っていますから支度したくはなんにも要いりませんなんて、へっ、こんなこと云うのは、もう考えてもいやになる。そこで今夜はここへ泊ろう。」

大学士は大きな近眼鏡を

ちよつと直してにやにや笑い

小屋へ入って行つたのだ。

土間には四つの石かけが

炉ろの役目をしその横には

櫛ほだもいくらか積んである。

大学士はマツチをすつて

火をたき、それからビスケットを出し

もそもそ喰たべたり手帳に何か書きつけたり

しばらくの間していたが

おしまいには火をどんだん燃して

ごろりと藁わらにねころんだ。

夜中になつて大学士は

「うう寒い」

と云いながら

ばたりとはね起きて見たら

もうたきぎが燃え尽つきて

ただのおきだけになつていた。

学士はいそいでたきぎを入れる。

火は赤く愉快ゆかいに燃え出し

大学士は胸をひろげて

つくづくとよく暖る。

それから一寸外ちよつとへ出た。

二十日の月は東にかかり

空気は水より冷たかった、

学士はしばらく足踏<sup>あしぶ</sup>みをし

それからたばこを一本くわえマツチをすつて

「ふん、実にしずかだ、夜あけままでまだ三時間半あるな。」

つぶやきながら小屋に入った。

ぼんやりたき火をながめながら

わらの上に横になり

手を頭の上で組み

うとうとうとうとした。

突<sup>とつぜん</sup>然頭の下のあたりで

小さな声で物を云い合ってるのが聞えた。

「そんなに肱<sup>ひじ</sup>を張らないでお呉<sup>く</sup>れ。おれの横の腹に病気が起るじゃないか。」

「おや、変なことを云うね、一体いつ僕<sup>ぼく</sup>が肱を張ったね」

「そんなに張っているじゃないか、ほんとうにお前この頃<sup>ごろ</sup>湿<sup>しつ</sup>気を吸ったせいかひどくのさ

ぱり出して来たね」

「おやそれは私のことだろうか。お前のことじやなかろうかね、お前もこの頃は頭でみり私を押しつけようとするよ。」

大学士は眼を大きく開き

起き上つてその辺を見まわしたが

誰れも居らない様だった。

声はだんだん高くなる。

「何がひどいんだよ。お前こそこの頃はすこしばかり風を呑んだせいか、まるで人が変わったように意地悪になったね。」

「はてね、少しぐらい僕が手足をのばしたつてそれをとやこうお前が云うのかい。十万二千年昔のことを考えてごらん。」

「十万何千年前とかがどうしたの。もっと前のことき、十万百万千万年、千五百の万年の前のあの時をお前は忘れてしまっているのかい。まさか忘れはしないだろうがね。忘れなかつたら今になって、僕の横腹を肱で押すなんて出来た義理かい。」

大学士はこの語を聞いて

すっかり愕ろいてしまう。

「どうも実に記憶きおくのいいやつらだ。ええ、千五百の万年の前のその時をお前は忘れてしまっているのかい。まさか忘れはしないだろうがね、ええ。これはどうも実に恐れおそ入ったね、いったい誰だ。変に頭のいいやつは。」

大学生は又そろそろと起きあがり

あたりをさがすが何も無い。

声はいよいよ高くなる。

「それはたしかに、あなたは僕の先輩せんぱいさ。けれどもそれがどうしたの。」

「どうしたのじゃないじゃないか。僕がやつと体たい格かくと人格を完成してほっと息をついてるとお前がすぐ僕の足もとでどんな声をしたと思うね。こんな工合ぐあいさ。もし、ホンブレンさま、ここの所で私もちつとばかり延びたいと思います。どうかあなたさまのおみあしさにでも一寸取りつかせて下さいませ。まあこういうお前のことばだったよ。」

樽ノ木学士は手を叩たたく。

「ははあ、わかった。ホンブレンさまと、一人はホルンブレンドだ。すると相手は誰だろう。わからんなあ。けれども、ふふん、こいつは面おも白しろい。いよいよ今日も問答がはじまった。しめ、しめ、これだから野宿はやめられん。」

大学士は煙草たばこを新らしく

一本出してマツチをする

声はいよいよ高くなる。

もつともいくら高くても

せいぜい蚊かの軍歌ぐらいだ。

「それはたしかにその通りさ、けれどもそれに対してお前は何と答えたね。いいえ、それは困ります、どうかほかのお方とご相談下さいと斯こんなに立派にはねつけたろう。」

「おや、とにかくさ。それでもお前はかまわず僕の足さきにとりついたらだよ。まあ、そんなこと出来たもんだろうかね。もつとも誰かさんはできたようさ。」

「あてこするない。とりついたらんじやないよ。お前の足が僕の体骨の頭のとこにあつただよ。僕はお前よりももつと前に生れたジツコさんを頼たのんだんだよ。今だって僕はジツコさんは大事に大事にしてあげてるんだ。」

大学士はよろこんで笑い出す。

「はっはっは、ジツコさんというのは磁鉄鉱だね、もうわかったさ、喧嘩けんかの相手はバイオタイトだ。して見るとなんでもこの辺にさつきの花崗岩かこうがんのかけらがあるね、そいつの中

の鉢物がかやかや物を云つてゐるんだね。」

なるほど大学士の頭の下に

支那しなの六錢銀貨のくらしいの

みかげのかけらが落ちていた。

学士はいよいよここにこする。

「そうかい。そんならいいよ。お前のような恩知らずは早く粘土ねんどになつちまえ。」

「おや、呪のろいをかけたね。僕も引ひつ込ひんじやいないよ。さあ、お前のような、」

「一寸ちよつとお待ちなさい。あなた方は一体何をさつきから喧嘩けんかしてゐるんですか。」

新らしい二人の声が

一いっしょ緒しょにはつきり聞え出す。

「オーソクレさん。かまわないで下さい。あんまりこいつがわからないもんですからね。」

「双子ふたごさん。どうかかまわないで下さい。あんまりこいつが恩知らずなもんですからね。」

「ははあ、双晶そうしょうのオーソクレスが仲裁ちゆうさいに入った。これは実におもしろい。」

大学士はたきびに手をあぶり

顔中口にしてよろこんで云う。

二つの声が又聞える。

「まあ、静かになさい。僕たちは実に実に長い間、堅く堅く結び合つてあのまっくらなまっくらなところで一緒にまわりからのほげしい圧迫やすてきな強い熱にこらえて来たではありませんか。一時はあまりの熱と力にみんな一緒に氣違いにでもなりそうなのをじつとこらえて来たではありませんか。」

「そうです、それは全くその通りです。けれども苦しい間は人をたのんで楽になると人こそねむのはぜんたいいい事なんでしょうか。」

「何だつて。」

「ちよつと、ちよつと、ちよつとお待ちなさい。ね。そして今やつとお日さまを見たでしょう。そのお日さまも僕たちが前に土の底でコングロメレートから聞いたとは大へんなちがいではありませんか。」

「ええ、それはもうちがつてます。コングロメレートのはなしではお日さまはまっかで空は茶いろなもんだと云つていましたが今見るとお日さまはまっ白で空はまっ青です。あの人はうそつきでしたね。」

双子の声が又聞えた。

「さあ、しかしあのコングロメレートという方は前にただの砂利じやりだったころはほんとうに空が茶いろだったかも知れませんか。」

「そうでしょうか。とにかくうそをつくこととひとの恩を仇あだでかえすのとはどつちも悪いことですな。」

「何だと、僕のことを云つてるのかい。よしさあ、僕も覚悟かくごがあるぞ。決闘けつとうをしろ、決闘を。」

「まあ、お待ちなさい。ね、あのお日さまを見たときのうれしかったこと。どんなに僕らは叫さけんだでしょう。千五百万年光というものを知らなかったんだもの。あの時鋼はがねの槌つちがギンギンと僕らの頭にひびいて来ましたね。遠くの方で誰たれかが、ああお前たちもとうとうお日さまの下へ出るよと叫んでいた、もう僕たちの誰と誰とが一緒になって誰と誰とがわかれなければならないか。一向判わからなかつたんですな。さよならさよならってみんな叫びましたねえ。そしたら急にパツと明るくなつて僕たちは空へ飛びあがりましたねえ。あの時僕はお日さまの外に何か赤い光るものを見たように思うんですよ。」

「それは僕も見ただよ。」

「僕も見ただよ、何だつたらうね、あれは。」

大学士は又笑う。

「それはね、明らかにたがねのさきから出た火花だよ。パチツて云つたろう。そして熱かつたろう。」

ところが学士の声などは

鉞物どもに聞えない。

「そんなら僕たちはこれからさきどうなるでしょう。」

双子の声が又聞えた。

「さあ、あんまりこれから愉快ゆかいなことでもないですよ。僕が前にコングロメレートから聞きましたけどどうも僕らはこのまま又土の中にうずもれるかそうでなければ砂か粘土かにわかれてしまうだけなようですよ。この小屋の中に居たって安心にもなりません。内に居たって外に居たってたかが二千年もたつて見れば結局おなじことでしょう。」

大学士はすつかりおどろいてしまう。

「実にどうも達観してるね。この小屋の中に居たって外に居たってたかが二千年も経たつて見れば粘土か砂のつぶになる、実にどうも達観してる。」

その時俄にわかにピチピチ鳴り

それからバイオタが泣き出した。

「ああ、いた、いた、いた、いた、痛あい、いたい。」

「バイオタさん。どうしたの、どうしたの。」

「早くプラジヨさんをよばないとだめだ。」

「ははあ、プラジヨさんというのはプラジオクレースで青白いから医者なんだな。」

大学士はつぶやいて耳をすます。

「プラジヨさん、プラジヨさん。プラジヨさん。」

「はあい。」

「バイオタさんがひどくおなか痛がつてます。どうか早く診みて下さい。」

「はあい、なあにべつだん心配はありません。かぜを引いたのでしょう。」

「ははあ、こいつらは風を引くと腹が痛くなる。それがつまり風化だな。」

大学士は眼鏡めがねをはずし

はん巾はんげちで拭ふいて眩つぶやく。

「プラジヨさん。お早くどうか願います。只ただいま今気絶をいたしました。」

「はあい。いまだんだんそつちを向きますから。ようつと。はい、はい。これは、なるほ

ど。ふふん。一寸脈をお見せ、はい。こんどはお舌、ははあ、よろしい。そして第十八へきかい予備面が痛い。なるほど、ふんふん、いやわかりました。どうもこの病気は恐いですよ。それにお前さんのからだは大地の底に居たときから慢性りよくでい病にかかつて大分軟化してますからね、どうも恢復の見込がありません。」

病人はキシキシと泣く。

「お医者さん。私の病気は何でしょう。いつごろ私は死にましよう。」

「さよう、病人が病名を知らなくてもいいのですがまあ蛭石病の初期ですね、所謂ふう病の中の一つ。俗にかぜは万病のもとと云いますがね。それから、ええと、も一つのご質問はあなたの命でしたかね。さよう、まあ長くても一万年は持ちません。お気の毒ですが一万年は持ちません。」

「あああ、さっきのホンブレンのやつ呪いが利いたんだ。」

「いや、いや。そんなことはない。けだし、風病にかかつて土になることはけだしすべて吾人に免かれぬことですから。けだし。」

「ああ、プラジヨさん。どんな手あてをいたしたらよろしゅうございませうか。」

「さあ、そう云う工合に泣いているのは一番よろしくありません。からだをねじってあち

こちらのへきかいよび面にすきまをつくるのはなおさら、よろしくありません。その他風にあたれば病気のしようけつを来きたします。日にあたれば病勢がつのります。霜しもにあたれば病勢が進みます。露つゆにあたれば病状がこう進みます。雪にあたれば症状が悪変します。じつとしてるのはなおさらよろしくありません。それよりは、その、精神的に眼をつむって観念するのがいいでしょう、わがこの恐おそれるところの死なるものは、そもそも何であるか、その本質はいかん、生死巖がんとう頭に立って、おかしいぞ、はてな、おかしい、はて、これはいかん、あいた、いた、いた、いた、いた、いた、」

「プラジヨさん、プラジヨさん、しつかりなさい。一体どうなすつたのです。」

「うむ、私も、うむ、風病のうち、うむ、うむ。」

「苦しいでしょう、これはほんとうにお気の毒なことになりました。」

「うむ、うむ、いいえ、苦しくありません。うむ。」

「何かお手あていたしましょう。」

「うむ、うむ、実はわたくしも地面の底から、うむ、うむ、うむ、大分力オリン病にかかっていた、うむ、オーソクレさん、オーソクレさん。うむ、今こそあなたにも明します。あなたも丁度わたし同様の病気です。うむ。」

「ああ、やっぱりさようでしたか。全く、全く、全く、実に、実に、あいた、いた、いた、いた。」

そこでホンブレンドの声でした。

「ずいぶん神経過敏かびんな人だ。すると病気でないものは僕とクオーツさんだけだ。」

「うむ、うむ、そのホンブレもバイオタと同病。」

「あ、いた、いた、いた。」

「おや、おや、どなたもずいぶん弱い。健康なのは僕一人。」

「うむ、うむ、そのクオーツさんもお気の毒ですがクウシヨウ中の瓦斯ガスが病因です。うむ

。

「あいた、いた、いた、いた。」

「ずいぶんひどい医者だ。漢方の藪医やぶいだな。とうとうみんな風化かな。」

大学士は又新らしく

たばこをくわえてにやにやする。

耳の下では鉋物どもが

声をそろえて叫んでいた。

「あ、いた、いた、いた、いた、た、たた。」

みんなの声はだんだん低くとうとうしんとしてしまふ。

「はてな、みんな死んだのか。あるいは僕だけ聞えなくなったのか。」

大学士はみかげのかげらを

手にとりあげてつくづく見て

パチツと向うの隅へ弾く。

それから櫓を一本くべた。

その時はもうあげ方で

大学士は背囊から

巻煙草を二包み出して

櫓のお礼に藁に置き

背囊をしよい小屋を出た。

石切場の壁はすっかり白く

その西側の面だけに

月のあかりがうつつていた。

野宿第三夜

(どうも少し引き受けようが、軽率けいそつだったな。グリーンランドの成金なりきんがびっくりする程ほど立派な蛋白石たんぱくせきなどを、二週間でさがしてやろうなんてのは、実際少し軽率だった。

どうも斯こう人の居ない海岸などへ来て、つくづく夕方歩いていると東京のまぢのまん中で鼻の赤い連中などを相手にして、いい加減ほらの法螺ふを吹いたことが全く情けなくなつちまう。どうだ、この頁岩けつがんの陰気いんきなこと。全くいやになつちまうな。おまけに海も暗くなつたし、なかなか、流紋玻璃りゅうもんはりにも出でつ会くわささない。それに今夜もやつぱり野宿だ。野宿も二晩ぐらいいいが、三晩となつちやうんざりするな。けれども、まあ、仕方もないさ。ビスケットのあるうちは、歩いて野宿して、面白おもしろい夢ゆめでも見る分が得というもんだ。)

例ならの櫛なノ木大学士が

ボケツト  
衣囊ボケツトに両手を突つ込んで

少しせ中を高くして

つくづく考え込みながら

もう夕方の鼠ねずみいろの

頁岩の波に洗われる

海岸を大股おおまたに歩いていった。

全く海は暗くなり

そのほのじろい波がしらだけ

一列、何かけもののように見えたのだ。

いよいよ今日は歩いても

だめだと学士はあきらめて

びたつと岩に立ちどまり

しばらく黒い海面と

向うに浮ぶ腐った馬鈴薯いものような雲を

眺めながていたが、又またポケットから

煙草たばこを出して火をつけた。

それからくるつと振り向いて

陸の方をじつと見定めて

急いでそっちへ歩いて行つた。

そこには低い崖がけがあり

崖あしの脚には多分は湧なみで

削けずられたらしい小さな洞ほらがあつたのだ。

大学士はにこにこして

中へはいつて背囊はいのうをとる。

それからまつくらなところで

もしやもしやビスケットを喰たべた。

ずうつと向うで一列湧なみが鳴るばかり。

「ははあ、どうだ、いよいよ宿がきまつて腹もできると野宿もそんなに悪くない。さあ、

もう一服やつて寝ねよう。あしたはきつとうまく行く。その夢を今夜見るのも悪くない。」

大学士の吸う巻煙草が

ポツンと赤く見えるだけ、

「斯こう納まつて見ると、我わがはい輩はいもさながら、洞熊ほらくまか、洞窟どうくつ住人だ。ところでもう寝よ

う。

闇<sup>やみ</sup>の向うで

涛がぼとぼと鳴るばかり

鳥も啼<sup>な</sup>かなきや

洞をのぞきに人も来ず、と。ふん、斯<sup>こ</sup>んなあんばいか。寝ろ、寝ろ。「

大学生はすぐとろとろする

疲<sup>つか</sup>れて睡<sup>ねむ</sup>れば夢も見ない

いつかすっかり夜が明けて

昨夜の続きの頁<sup>けつ</sup>岩<sup>がん</sup>が

青白くぼんやり光っていた。

大学生はまるでびっくりして

急いで洞を飛び出した。

あわてて帽<sup>ぼうし</sup>子を落しそうになり

それを押<sup>おさ</sup>えさえもした。

「すっかり寝過ごしちゃった。ところでおれは一体何のために歩いているんだっただかな。

ええと、よく思い出せないぞ。たしかに昨日も一昨日も人の居ない処をせつせと歩いてい  
 たんだが。いや、もつと前から歩いていたぞ。もう一年も歩いているぞ。その目的はと、  
 はてな、忘れたぞ。こいつはいけない。目的がなくて学者が旅行をするということはない、  
 必ず目的があるのだ。化石じやなかつたかな。ええと、どうか第三紀の人類に就いてお調  
 べを願います、と、誰か云つたようだ。いや、そうじやない、白堊紀の巨きな爬虫類  
 の骨髄を博物館の方から頼まれてあるんですがいかがでございましょう、一つお探しを  
 願われますまいかと、斯うじやなかつたかな。斯うだ、斯うだ、ちがいない。さあ、とこ  
 ろでここは白堊系の頁岩だ。もうここでおれは探し出すつもりだったんだ。なるほど、は  
 じめてはつきりしたぞ。さあ探せ、恐竜の骨髄だ。恐竜の骨髄だ。」

学士の影は

黒く頁岩の上に落ち

おおまた  
 大股に歩いていたから

おど  
 踊っているように見えた。

海はもの凄く青く

空はそれより又青く

幾いくきれかのちぎれた雲が

まばゆくそこに浮いていた。

「おや出たぞ。」

櫓ならノ木大学士が叫さけび出した。

その灰いろの頁岩の

平ひららな奇きれい麗な層面に

直径が一米メートルばかりある

五本指の足あとが

深く喰くい込こんでならんでいる。

所々上の岩のために

かくれているが足裏の

皺しわまではつきりわかるのだ。

「さあ、見附みつけたぞ。この足跡あしあとの尽つきた所には、きつとこいつが倒たおれたまま化石している。

巨こおきな骨だぞ。まず背骨なら二十米はあるだろう。巨こおきなもんだぞ。」

大学士はまるで雀こおどり躍して

その足あとをつけて行く。

足跡はずいぶん続き

どこまで行くかわからない。

それに太陽の光線は赭あかく

たいへん足が疲れたのだ。

どうもおかしいと思いつながら

ふと気がついて立ちどまったら

なんだか足が柔やわらかな

泥どろに吸すわれているようだ。

堅かたい頁けつ岩がんの筈はずだつたと思つて

櫛ノ木大学士はうしろを向いた。

そしたら全く愕おどろいた。

さつきから一心に跡つけて来た

巨がまきな、臺がまの形の足あとは

なるほどずうつと大学士の

足もとまでつづいていて

それから先ももつと続くらしかったが

も一つ、どうだ、大学士の

銀座でこさえたながぐつ長靴の

あともぞろつとついていた。

「こいつはひどい。我輩わがはいの足跡までこんなに深く入るといふのは実際少し恐おそれ入った。

けれどもそれでも探求の目的を達することは達するな。少し歩きにくいだけだ。さあもう斯こうなつたらどこまでだつて追つて行くぞ。」

学士はいよいよ大股おおまたに

その足跡をつけて行つた。

どかどか鳴るものは心臓

ふいごのようなものは呼吸、

そんなに一生涯けん命だつたが

又そんなにあたりもしずかだつた。

大学士はふと波打ぎわを見た。

涛なみがすっかりしずまっていた。

たしかにさつきまで

寄せて吠ほえて砕くだけていた涛が

いつかすっかりしずまっていた。

「こいつは変だ。おまけにずいぶん暑いじゃないか。」

大学士はあおむいて空を見る。

太陽はまるで熟した苹果りんごのようで

そこらも無暗むやみに赤かった。

「ずいぶんいやな天気になった。それにしてもこの太陽はあんまり赤い。きつとどこかの火山が爆発ぼくはつをやった。その細かな火山灰が正しく上層の気流に混じて地球を包围しているな。けれどもそれだからと云って我輩のこの追跡には害にならない。もうこの足あとの終るところにあの途方とほうもない爬虫はちゅうの骨がころがってるんだ。我輩はその地点を記録する。もう一足だぞ。」

大学士はいよいよ勢いきおいこんで

その足跡をつけて行く。

ところが間もなく泥浜は  
岬みさきのように突き出した。

「さあ、ここを一つ曲つて見る。すぐ向う側にその骨がある。けれども事によつたらすぐ  
ないかも知れない。すぐなかつたら少し追つて行けばいい。それだけのことだ。」

大学士はにこにこ笑い

立ちどまつて巻煙草まきたばこを出し

マッチを擦すつて煙けむりを吐く。

それからわぎと顔をしかめ

ごくおうように大股おおまたに

岬をまわつて行つたのだ。

ところがどうだ名高い櫓ならノ木大学士が

釘くぎ付けにされたように立ちどまつた。

その眼めは空むなしく大きく開き

その膝ひざは堅くなつてやがてふるえ出し

煙草もいつか泥に落ちた。

青ぞらの下、向うの泥の浜の上に

その足跡の持ち主の

途方もない途方もない 雷 竜 氏が

いやに細長い頸をのぼし

汀の水を呑んでいる。

長さ十間、ざらざらの

鼠いろの皮の雷竜が

短い太い足をちぢめ

厭らしい長い頸をのたのたさせ

小さな赤い眼を光らせ

チュウチュウ水を呑んでいる。

あまりのことに櫛ノ木大学士は

頭がしいんとなつてしまった。

「一体これはどうしたのだ。中生代に来てしまったのか。中生代がこっちの方へやって来たのか。ああ、どっちでもおんなじことだ。とにかくあすこに 雷 竜 が居て、こっちさ

え見ればかけて来る。大学士も魚も同じことだ。見るなよ、見るなよ。僕はいま、ごくこつそりと戻るから。どうかしばらく、こつちを向いちやいけないよ。」

いまやなら櫛ノ木大学士は

そろりそろりと後あとすざ退りして

来た方へ遁にげて戻る。

その眼はじつと雷竜を見

その手はそつと空気を押おす。

そして雷竜の太い尾が

まず見えなくなりその次に

山のような胴どうがかくれ

おしまい黒い舌を出して

びちよびちよ水を呑んでいる

蛇へびに似たその頭がかくれると

大学士はまず助かったと

いきなり来た方へ向いた。

その足跡さへずんずんたどつて  
遁げてさえ行くならもう直きに  
汀に涛も打つて来るし  
空も赤くはなくなるし  
足あとももう泥に食い込まない  
堅い頁岩の上を行く。  
崖にはゆうべの洞もある  
そこまで行けばもう大丈夫  
こんなあぶない探険などは  
今度かぎりはやめてしまい  
博物館へも断わらせて  
東京のまちのまん中で  
赤い鼻の連中などを  
相手に法螺を吹いてればいい。  
大体こんな計算だった。

それもまるきり電いなすまのような計算だ。

ところが櫛ノ木大学士は

も一度ぎくつと立ちどまった。

その膝ひざはもうがたがたと鳴り出した。

見たまえ、学士の来た方の

泥の岸はまるでいちめん

うじやうじやの雷竜らいりゆうどもなのだ。

まっ黒なほど居おつたのだ。

長い頸くびを天に延ばすやつ

頸くびをゆつくり上下に振ふるやつ

急いで水にかけ込むやつ

実にまるでうじやうじやだった。

「もういけない。すっかりうまくやられちゃった。いよいよおれも食われるだけだ。大学士の号も一所になくなる。雷竜はあんまりひどい。前にも居るしうしろにも居る。まあただ一つたよりになるのはこの岬の上だけだ。そこに登っておれは助かるか助からないか、

事によつたら新生代の沖積世ちゆうせきせいが急いで助けに来るかも知れない。さあ、もうたつたこの岬だけだぞ。」

学士はそつと岬にのぼる。

まるで葦きのことあすなろとの

合の子みみたいな変な木が

崖にもじやもじや生えていた。

そして本当に幸なことは

そこには雷竜がいなかつた。

けれども折角せつかく登つても

そこらの景色は

あんまりいいというでもない、

岬の右も左の方も

泥なげの渚なげは、もう一めんの雷竜だらけ

実にもじやもじやしていたのだ。

水の中でも黒い白鳥のように

頭をもたげて泳いだり

頸くびをくるつとまわしたり

その厭いやらしいこと恐こわいこと

大学士はもう眼をつぶった。

ところがいつか大学士は

自分の鼻さきがふつつ鳴つて

暖いのに気がついた。

「とうとう来たぞ、喰くわれるぞ。」

大学士は観念をして眼をあいた。

大き二尺の四つ角な

まっ黒な雷竜の顔が

すぐ眼の前までにゆうと突き出され

その眼は赤く熟したよう。

その頸くびは途方とほうもない向うの

鼠いろのがさがさした胴まで

まるで管のように続いていた。

大学士はカーンと鳴った。

もう喰われたのだ、いやさめたのだ。

眼がさめたのだ、洞穴は

まだまっ暗で恐らくは

十二時にもならないらしかった。

そこで櫛ノ木大学士は

一つ小さなせきばらいをし

まだ雷竜がいるようなので

つくづく闇をすかして見る。

外ではたしかに涛の音

「なあんだ。馬鹿にしてやがる。もう睡れんぞ。寒いなあ。」

又たばこを出す。火をつける。

櫛ノ木大学士は宝石学の専門だ。

その大学士の小さな家

「貝の火兄けいてい弟てい商会」の

赤鼻の支配人がやって来た。

「先生お手紙でしたから早速とんで来ました。大へんお早くお帰りでした。ごく上等のやつをお見あたりでございましたか、何せ相手がグリーンランドの途方もない成金ですからありふれたものじゃなかなか承知しないんです。」

大学士は葉巻を横にくわえ

雲母紙うんもしを張った天てん井じょうを

斜ななめに見ながらこう云いった。

「うん探して来たよ、僕はぼく一ペン山へ出かけるともうどんなもんでも見附みつからんと云うことは断じてない、けだしすべての宝石はみな僕をしたつてあつまつて来るんだね。いやそれだから、此度こんどなんかもまつたくひどく困こつたよ。殊ことに君注文が割合やわに柔らかな蛋白石たんぱくせきだろう。僕がその山へ入つたら蛋白石どもがみんなぎらぎら飛びついて来てもうどうしてはなれないじゃないか。それが君みんな貴プレシ蛋白石アスオーバルの火の燃えるようなやつなんだ。望みのおりみんな背囊はいのうの中に納めてやりたいことはもちろんだったが、それでは僕も

身動きもできなくなるのだから気の毒だったがその中からごくいいやつだけ撰えらんださ。」

「ははあ、そいつはどうも、大へん結構でございました。しかし、そのお持ち帰りになりました分はいずれでございますか。一寸ちよつと拝見をねがいとう存じます。」

「ああ、見せるよ。ただ僕はあんな立派なやつだから、事によつたらもうすっかり曇くもつたじゃないかと思うんだ。実際蛋白石ぐらいたよりのない宝石はないからね。今日虹にじのように光っている。あしたは白いただの石になつてしまふ。今日は円くて美しい。あしたは碎くだけてこなごなだ。そいつだね、こわいのは。しかしとにかく開いて見よう。この背囊さ。」

「なるほど。」

貝の火けいてい兄弟商会の

鼻の赤いその支配人は

こくつと息を呑のみながら

大学士の手もとを見つめている。

大学士はごく無雑作に

背囊をあけて逆さにした。

下等なはりたんぱくせき蛋白石が

三十ばかりころげだす。

「先生、困るじやありませんか。先生、これでは、何でも、あんまりじやありませんか。」  
 榎ノ木<sup>なら</sup>大学士は怒り出した。

「何があんまりだ。僕の知ったこつちやない。ひどい難儀<sup>なんぎ</sup>をしてあるんだ。旅費さえ返せばそれでよかろう。さあ持つて行け。帰れ、帰れ。」

大学士は上着の衣囊<sup>かぐし</sup>から

鼠<sup>ねずみ</sup>いろの皺<sup>しわ</sup>くちやになつた状袋<sup>じょうぶくろ</sup>を

出していきなり投げつけた。

「先生困ります。あんまりです。」

貝の火兄弟商会の

赤鼻の支配人は云いながら

すばやく旅費の袋をさら

上着の内衣囊<sup>うちポケット</sup>に投げ込んだ。

「帰れ、帰れ、もう来るな。」

「先生、困ります。あんまりです。」

とうとう貝の火兄弟商会の  
赤鼻の支配人は帰って行き  
大学士は葉巻を横にくわえ  
雲母紙を張った天井を  
斜めに見ながらにやつと笑う。

# 青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1995（平成7）年5月30日11刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2008年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 檜ノ木大学士の野宿

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>